

白井堯子

『明治期女子教育における日英の交流』

津田梅子・成瀬仁蔵・ヒューズ・フィリップス
をめぐって』

(下メス出版 二〇一八年 一五三頁)

大江 満

日本における女子高等教育の先駆者としてこれまで研究対象となってきたのは、おもにアメリカの女性教師や女性宣教師たちであった。そして、彼女らを日本に派遣したキリスト教諸派の伝道協会についてもかなりの研究業績がある。

このようなアメリカ主流の女子高等教育における先行研究のなかで、本書は、アメリカ留学の経緯などからアメリカの影響が指摘されてきた日本の女子高等教育を創始した人物たちが、実は意外にもイギリス教育者との交流やイギリスからの支援や影響を受けていたことを、新たな一次史料を駆使して実証的に明らかにし、これまで看過されてきた日英交流の新たな一面を発掘した画期的な文献といえるものである。

本書で取り上げられているのは、一九〇〇(明治三

三)年に女子英学塾(現・津田塾大学)を創立した津田梅子(第一章)と、一九〇一(明治三四)年に日本女子大学校(現・日本女子大学)を開学した成瀬仁蔵(第二・第三章)の二人の日本人である。そして、イギリス女子教育のパイオニアとして初期日本女子大学校で成瀬を助けたエリザベス・P・ヒューズ(Elizabeth Phillips Hughes 第二・第三章)と、その後四〇年間もの長きにわたり日本女子大学校の教育に献身した女性宣教師エリン・グラデイス・フィリップス(Elinor Gladys Phillips 第四章)という二人のイギリス人女性教育者である。

本書の構成上、聖公会(アングリカン)との関連では第一章と第四章が濃く、第三章はそれほどではないものの、第二章では多少の関与がみとめられる内容となっている。津田塾大学、日本女子大学(現在名)のいずれも、キリスト教のミッション(伝道、宣教)を目的としない世俗の私立女子高等教育機関であるにもかかわらず、キリスト教(この場合はイギリス国教会を指す)との深い関係がすでに創立時からみとめられるという指摘は、斬新な研究成果といえよう。さらに、両校ともこれまでの先行研究史上においては、アメリカの影響のみを指摘されてきたことを顧みれば、本書がいかに先駆的で批評的な内容であるかも理解される。

女子高等教育機関としては、この両校は、官立機関で

ある一八七五（明治八）年開校の東京女子師範学校（現・お茶の水女子大学）に次ぐもので、世俗の私立機関としてはパイオニア的な存在であった。創立当時の女子英学塾や日本女子大学校は、制度上は「各種学校令」によって認可されたが、一九〇三（明治三六）年の「専門学校令」によって翌一九〇四（明治三七）年に高等教育機関としての専門学校となった。

著者は、イギリスのコツウォウルズ (Cotswolds) にあるイギリス国教会の援助によって創立されたチェルトナム・レイデイズ・カレッジ (Cheltenham Ladies' College) のアーカイヴズと、オックスフォード大学ロウズ・ハウス・ライブラリ (Rhodes House Library) において一世紀以上眠っていた未見の新史料を探索し、日本の外務省史料と併せ、日本の女子高等教育の創始者たちとイギリス女子高等教育の先駆者との関係に新しい光を当て、新たな史実を提示している。津田梅子のオックスフォード大学女子カレッジ留学は、梅子が創立する女子英学塾創立の一年前であり、さらに日英同盟締結直前でもあったことから、当時の外務大臣隈重信も梅子の留学を援助していたという史実は、日英外交史の観点からも興味深い。

当時女子高等教育に批判的な世論が大勢を始めていた日本において、開学したばかりの日本女子大学校の英文

学部の教壇に立って成瀬を助けたヒューズは、ケンブリッジ女子高等師範学校在職中に女子教育に関する世界会議にイギリスの代表として出席し、退職後は、教え子の外国人留学生を訪ねて世界を廻るなど、国際的に活躍していた人物であった。彼女の滞日期の講演や、埋もれていた新発見の英文著書『日本人学生のための英文学』の内容が、黎明期の日本の女子高等教育に多大な寄与をなすものであったことは、今回初めて明らかにされた。

フィリップスはイギリス国教会系の在日女子宣教師である聖ヒルダ伝道団に加わるため来日した宣教師であったが、東京の香蘭女学校、日本女子大学校英文学部にも教育者として大きく貢献した。また聖ヒルダ伝道団の暁星寮の寮監としても（その寮生はほとんどが日本女子大学校生であった）、のちに社会に貢献する敬虔なクリスチャンを数多く輩出している。一八九九（明治三二）年の文部省訓令第一二号により、政府認可校においては宗教教育や宗教儀式が認められなかった当時、日本女子大学校の学生の多くは暁星寮において彼女のバイブル・クラスに参加することができたのであるが、それは強制されたり勧誘されたりしたものではなく、希望者にはだれにでも開かれたものであった。フィリップスは二回の世界会議において、「日本の女性のための理想の教育」と題して日本女子大学校の教育について初めて国際社会に

向けて報告し、また日本の女子学生を良きクリスチャンに育てていくためには寮生活が不可欠であることを報告する。そして、校長成瀬仁蔵の配慮によって、ミッション・スクールではない世俗の高等教育機関である日本女子大学校が、キリスト教教育をおこなう暁星寮を正式に外寮として認めたという事実は大変興味深いものである。対英米戦争に突入する直前の昭和戦前期まで、明治期から滞日四〇年に及ぶフィリップスの女子教育は、まさに日英文化交流の懸け橋となっていたことが、本書では説得力をもって語られている。

前著『福沢諭吉と宣教師たち―知られざる明治期の日英関係』（未來社、一九九九年）に続くこのような研究成果は、今後、日英文化交流史のみならず、日本近代教育史、日本女子教育史、日本キリスト教史の諸分野においても、多大な貢献をもたらすことになるであろう。